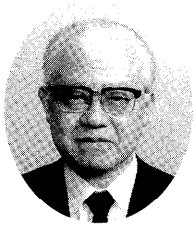
巻頭言

情報処理学会とカタカナ語



牛　島　和　夫

本会監事　九州大学大学院システム情報科学研究科

4月からモーバイルコンピューティング研究会が新しく発足する．この件が理事会に報告された際に私は研究会の名前にカタカナを使わねばならない理由を質問した．この言葉を世間に認知させたいというのが一番大きな理由だということであった．この研究会を含めて本会は3つの領域に全部で27研究会を擁することになる．すなわちコンピュータサイエンス領域に9研究会，情報環境領域に11研究会，フロンティア領域に7研究会である．

27の研究会の名前は情報処理学会が担当する分野を示す重要語だといってよいだろう．学会の顔である．現在の研究会の名前はその役を果たしているだろうか．そのような目で研究会の名前を改めて見直してみると実にカタカナが多い．27研究会名の文字数の合計272のうち188がカタカナである．ハイパフォーマンスコンピューティングのように18文字に及ぶものもある．字面は同じコンピューティングだけれど意味はやや異なる．

研究活動の中で日常的に使っている英単語を安易にカタカナにしていることはないか．カタカナ列を媒介にして原単語の綴りを読み手が思い浮かべることを暗黙の内に期待しているようだ．専門の近い読み手ならば，長いカタカナ列を一瞥しただけで2つあるいは3つからなる原単語の綴りや前後の文脈を思い浮かべることができる．非専門家はそうはいかない．カタカナ列が前後の脈絡なく切り出されて提示されると，言葉がきちんと定義されずにムードだけが伝わることになる．

ライトプロセスというカタカナ列がある．「ライト」とは，light, write, right あるいは Wright 氏だろうか．英語の派生語も断りなしに遠慮なく現れる．プログラム，プログラミング，プログラマは公認として，スライス，スライシング，スライサはどうか．プログラマは人だけれどスライサはプログラムテキストの一部を系統的に切り出すツールである．

筆者はカタカナ語の使用を排除しようと主張しているわけではない．日本語の文章は分かち書きされない．それにもかかわらず斜め読みが可能なのは，漢字と平仮名の微妙な使い分けのゆえである．カタカナ語を適切に用いることによって，文章中にその存在を際だたせることができて，斜め読みにも都合がよい．本稿で片仮名と書かずにカタカナと書いているのはそのためだ．しかし，カタカナの使用が過剰になると互いに干渉し合ってその効果が薄れるばかりか逆効果になる．

研究会の登録メンバが千名を超える研究会はない．3万名の会員にくらべれば3％に満たない．すなわち97％以上は会員といえどもその分野には素人である可能性がある．学会は担当する学問分野を広く社会に普及させる役割も担っている．専門家集団以外にも通じる普通の言葉をできるだけ使うように努力することも重要だ．カタカナ語を書くたびにカタカナでよいのかどうか必ず検討する心構えがほしい．

情報技術の進展はあまりに速い．したがって，適切な日本語を用意しようと時間をかけていたのでは間に合わないということもあるだろう．専門家仲間での会話ならばそれでよい．書き物では読み手に対する，専門家としての書き手の責任がある．カタカナ語を使わねばならないというのは新しい概念や用語が主としてアメリカ発だということを意味している．追いつき追い越せ型ではなく，自ら新しい概念やシステムを生み出して世界に発信しなければならない．それに日本語で名前をつける．英語表現も必要ならば用意しておく．「わざあり」や「ゆうこう」のようにそのまま通用すればもっとよい．

（平成9年2月5日）